

第8章 沼田町の観光と雪の可能性

藤田 譲

8.1 沼田町の観光の現状とその特色

沼田町は層雲峡や定山溪のように観光資源に恵まれた「観光地」とは決していえない。図8-1のように、観光客の入りこみ客数をみても、平成11年度の約75万人¹を除けば毎年30万人程度で、特別観光客が多いというわけではない。しかし、こういった評価の根底には「観光」を、「客をより多く集め、より多くの利益を得る」べきものと捉えているところからくる。つまりはマスツーリズムの考えがこの評価の根底にあるといえるだろう。

しかし、沼田町の観光は、有名観光地に見られるような集客力を第一義的に置いているわけではない。それは、沼田町地域開発課の亀谷氏の次のような言葉に表れている²。

「他から人を呼ぶのが観光なのか、まちの人が楽しむのが観光なのかって言うのはすごく悩むときがあるんです。でね、考え付いた言葉がですね「観光は福祉」ではなかろうかっていうことなんです。

(中略)例えば、夜高あんどん祭があります。予算を使ってみんな楽しくワイワイするお祭なんですけれど、「夜高あんどん祭があるから遊びに来ないかい」って年寄りとか年配の方々が、言えるんですね。で、子供や孫に電話して「今度お祭あるからおいでよ」って「おいでよ」って言う代わりに立派なイベントでなくては困るんです。夜高あんどんも虫も、楽しくなかったら「なんだ楽しくないよ、もう来年来ないよ」っていったら福祉になんないんですよ。年配の方には。そんなことで観光は福祉であると思うんです」。

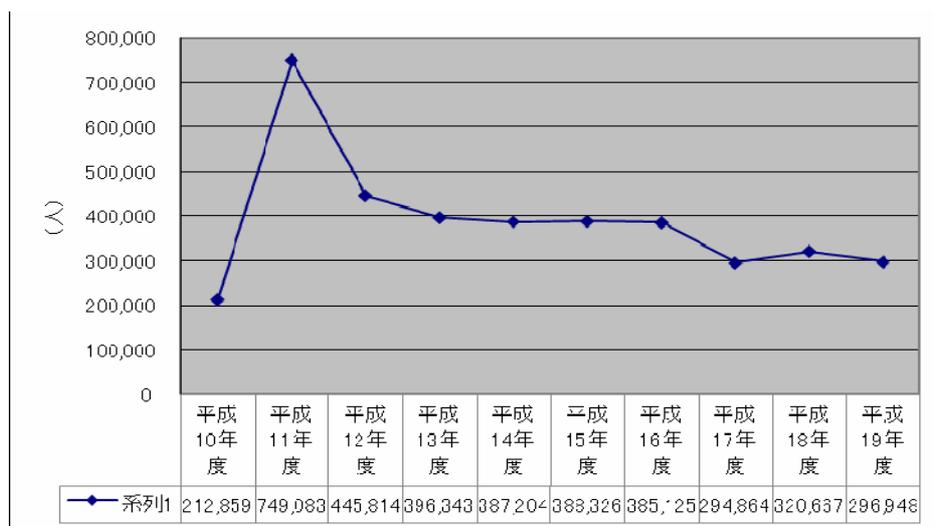


図8-1 沼田町の観光客入りこみ客数

¹ 1999年はNHK連続テレビ小説「すずらん」が放映された年である。

² 2008.11.17 沼田町地域開発課への聞き取りによる。

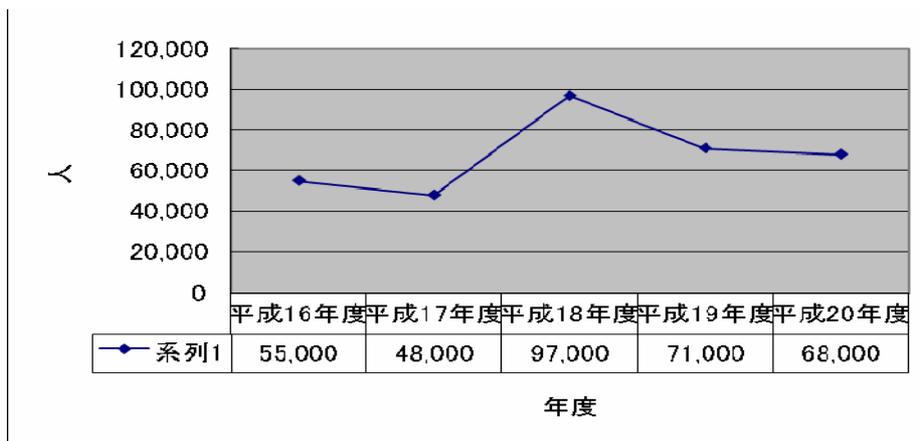


図 8-2 夜高あんどん祭り観光客入りこみ客数

亀谷氏の言葉にもあるように、観光は「福祉」であると捉えている点に沼田町の観光の特色がある。つまり、観光客をより多く集客することよりも、町内に住む人々が元気になること、町民が自分のまちを誇りに思えるようになることを「観光」の目的にしているのである。決して観光地とは呼べない沼田町において、まちに住む人、特に年配の方々が元気になる「観光」は、これまでのマストゥリズムを前提とした「観光」とは全く違うのである。

8.2 夜高あんどん祭の取り組み

8.2.1 夜高あんどん祭の起源

沼田町の夜高あんどん祭は、田祭りの行事として五穀豊穰天下泰平豊年万作を祝い、全町全域を挙げて盛賑をきわめるおめでたい伝習がその由来とされ、1977年に、開拓の祖沼田喜三郎翁の出身地である富山県小矢部市より沼田町に伝承された。

伝承によれば、承応2年（1653年）、越中砺波福野村の鎮守の氏神として、伊勢神宮より分霊を勧請した還宮の行列が加賀と越中の国境である具利加羅峠にさしかかったところで日暮れを迎え、どうにも先へ進めぬようになってしまい、この知らせを飛脚で知った村民たちが手に燈火用のあんどんを持って峠へと馳せ参じ、村を挙げて奉迎したのがその起源であるという。

8.2.2 夜高あんどん祭の現状

図 8-2 に示したとおり、夜高あんどん祭には、30周年記念祭で期間が3日間であった平成18年度の入込客数97000人を除けば、通常2日間で行われており、例年5～7万人の観光客が訪れる。図 8-1 に示した観光入り込み客数と照らし合わせると、約5分の1がこの祭の入込客であり、沼田町一のビッグイベントであることが推測される。

夜高あんどん祭に関係する主要な組織は沼田町観光協会・沼田町夜高あんどん実行委員

会・沼田町夜高あんどん保存会の3者であり、それぞれ役割分担が決まっている。

沼田町観光協会の事務局は役場の地域開発課にあり、祭に関係する仕事は、町内外への宣伝広告に関する事と、警察への道路使用申請等に関する事である。この2つの仕事の中でも観光協会は特に宣伝に力を入れている。「ロコミが最高の宣伝」という信念のもと毎年1万個のポケットティッシュを作成、札幌等で、手渡しで配っている。また、テレビ・ラジオなどのマスメディアを活用、CMも流し、町外の人々へ宣伝している。

沼田町夜高あんどん実行委員会は、ゴミの回収、会場の設営等祭の運営全般を取り仕切っている。事務局は沼田町商工会に置かれており、2008年度は運営費として町から570万円の補助を受けている。

沼田町夜高あんどん保存会は、あんどんおよび祭の維持保存に関する事を担当している。夜高あんどんを長く保存していくためにあんどんコンクールなどを催し、あんどんの普及活動に努めている。

8.2.3 夜高あんどん祭成功の要因

北海道には、アイヌ文化を除いて、夜高あんどん祭のように30年以上続けて行われている伝統行事は少ない。また、夜高あんどん祭に対する町の補助は570万円に収まっている。これら2つのことを考慮しても夜高あんどん祭は「成功」している事例であるといえよう。

夜高あんどん祭成功の要因は2つあると考えられる。

第一に、役場主導でなく住民主導で祭がはじめられたことである。亀谷氏は当時の様子について次のように述べている。

夜高あんどん祭がなぜ長く続けていられるのかっていう作戦を申しますと、小さいまち、役場職員の僕らは小・中・高とPTA会長になれないんですよ。暗黙で。町長に対する交渉ごとが出てくるんですね。だから、農業者とか商業者の方が（PTA会長を）やってくれる。で、最初に夜高あんどんをはじめた時に夜高あんどんを持ってきた商工会の人が、商工会と農協青年部で始めたんだよ、最初2基で。今18台もでているんだけど。農協青年部と商工会ではじめてんだよ。

これは何故かって言うと、やったら「これは楽しい」ってなったんですね。これは楽しいって。そしたらその人たちの中からPTA会長が出るんですよ。そしたら学校でもやろうよってなったんですよ。小学校でもやろうよ。中学校でもやろうよっていうことで広まっていったんですね。このときに役場と商工会とかでやっちゃたらたぶん広がり行政的な広がりになっちゃって長続きしなかったと思うんですよ。やっぱり町場の人が盛り上げてそれを行政がバックアップするというか、そんな体制であるべきかなって思っています。（中略）

祭に関しては全部町のなかで買うんですよ。（あんどんの）材料も買えるものはできるだけ沼田で買うんですよ。食べ物も飲み物も含めて。その金たるもの、予算では計り知れないものがあって。やっぱり商工会が潤うということは町全体が潤うということなんで。最初の30年前の人たちってよくぞ考えてやったもんだなあって思いますよ。

表 8-1 夜高あんどん祭の歴史

| 年 | 出来事 |
|----------------|--|
| 昭和 48 年 (1973) | ・ 第 1 回町民まつり開催 |
| 昭和 52 年 (1977) | ・ 小矢部市より夜高づくり指導交流団員 9 名が来町、あんどん作りを指導 ・ 9 月 小矢部市よりあんどん祭の「由緒書」が贈られる ・ 9 月 9・10 日 第 1 回あんどん祭。商工会と農協青年部の 2 基のあんどんが参加 |
| 昭和 53 年 (1978) | ・ 6 月 小矢部市へ親善訪問団 10 名が訪問、あんどんを研修 ・ 小矢部市より小中 2 基のあんどんが沼田町に寄贈 ・ 小学生の 2 基のあんどんが参加（作成と指導は商工会） ・ 農協と土地改良区の合同のあんどんが初参加。 ・ 役場あんどんが初参加 合計 6 基 ・ 夜高あんどん行事・町民まつり観光協会に町で 134 万を予算化 |
| 昭和 54 年 (1979) | ・ 清水より北清会のメンバー 11 名が沼田を訪問。 ・ 夜高節の伝来「奉納夜高節」が沼田神社に奉納。 ・ 夜高太鼓同好会があんどん祭に初参加 ・ 8 月小矢部市各中学校の代表 8 名が沼田町を訪問。 |
| 昭和 61 年 (1986) | ・ 夜高あんどん 10 周年記念事業 ・ 小矢部市津沢より大型あんどん沼田町に寄贈 ・ 松本小矢部市長があんどん祭に来町 ・ 北海道三大あんどん祭になる |
| 平成 6 年 (1994) | ・ 6 月 3・4 日 小矢部市に親善訪問団 26 名参加、津沢のあんどん祭に参加。 ・ 北海道三大あんどんサミット（八雲山車行列・知床斜里ねふた・沼田夜高あんどん・小矢部夜高あんどん）が沼田で開催 ・ 沼田町開基 100 年記念事業実施 ・ 「どさんこワイド 212」沼田スペシャル放送 |
| 平成 8 年 (1996) | ・ あんどん祭 20 周年記念事業実施。ふるさと特産品フェア・太鼓競演会・ロゴマークデザインコンペ |
| 平成 13 年 (2001) | ・ 25 周年記念夜高あんどん祭開催 |

出典：沼田町夜高あんどん保存会（2001）

夜高あんどん祭は、はじめ農協青年部と商工会によってはじまった。彼らの中から学校の PTA 会長になる者が現れ、学校にも夜高あんどんが普及するようになった。さらに、その広がりはやがて町全体に広がり、町が祭に予算を組んで補助するようになったのである。

亀谷氏によると、計画段階において役場主導で計画をおしすすめていたらその広がり行政的な広がりになり30年も長続きすることはなかったという。また、話の中にあるように、祭に必要な物資の大半を町内でまかなうことによって経済的にもプラスに働いていることも重要と思われる。

第二に、「公」と「私」が共同で祭を運営しているところにある。住民主導で祭は始まり、「公」の領域である役場が予算を出して祭は運営されている。あんどんの製作は住民の手によって祭の約3ヶ月前からはじめられる。その準備期間を通して住民同士のなんとも言えない連帯感が生まれるという。ただし、祭は「私」の部分の自助努力だけで継続させることは難しい。町が前面に出過ぎるような方法も問題かもしれないが、町がまったく関わらないということも、同様に問題となるだろう。ことに、周辺地域においては、私の領域の力は都市におけるそれとは同じものと扱うべきではない。相対的に私の領域の力が劣る周辺地域においては、公的領域の関与が必要となる場面が多いだろう。

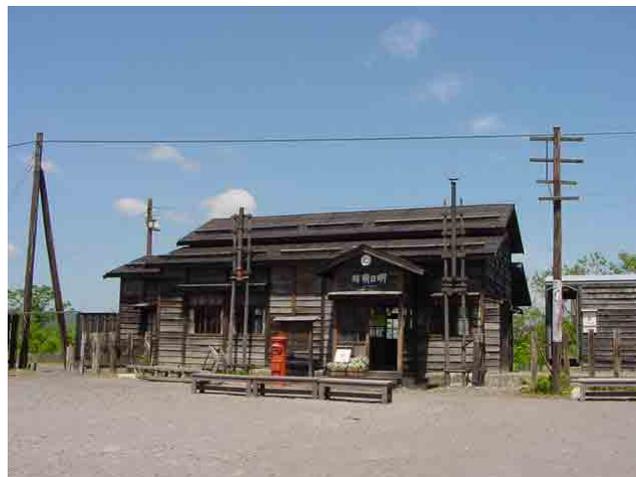
「共同のまちづくり」という言葉をよく耳にするが、官民一体で、町が一つとなって祭を成功させようとしている点で、夜高あんどん祭は、真に「共同」がなされているのではなかろうか。また、新しく町に住むようになった人々も、あんどん作成などをきっかけに町に溶け込む機会を得ることも多いという。

8.3 観光に関連するその他の取り組み

8.3.1 NHK 朝の連続テレビ小説「すずらん」

NHK 朝の連続テレビ小説「すずらん」は、沼田町を舞台に、1999年に放映された。「すずらん」は、主人公である“萌”が明日萌という小さな駅（架空の駅）で駅長に拾われ、さまざまな逆境を乗り越えて成長していく物語である。その物語の舞台となったのが、JR 留萌本線の恵比島駅である。恵比島駅が選ばれたのは、線路がどこまでも一直線であること、昭和初期にあっては困るような現代的なものが駅周辺にはないこと、駅前の広場と道路がメインストリートとしての雰囲気がある、といった理由からであった。実際の恵比島駅は、1907年9月に改築された駅舎が1986年11月に取り壊され、廃棄された車掌車を改造した簡易駅舎が置かれる無人駅となった。ドラマを撮影するにあたり、その簡易駅舎を古材で覆い、その横にドラマのための昭和初期の駅舎が再現された。また、ドラマの中で萌がたびたび訪れた「萌の丘」から眺める景色は絶景であり、ドラマ終了後多くの観光客が訪れるようになった。6月中旬から下旬にかけ

図 8-3 恵比島駅



出典：ウィキペディア

てルピナスの花が咲き誇り多くの観光客を和ませている。

「すずらん」ブームは、沼田町に多くの観光客をもたらした。放送がされた 1999 年度は、75 万人もの観光入り込み客数を記録、町内に多くの観光客が訪れた。しかしそのブームは長くは続かなかった。翌 2000 年に、映画「すずらん」が公開されたが、観光客を呼ぶ強い「追い風」にはならなかった（北海道新聞 2000.10.28）。沼田町の入りこみ客数はその後、右肩下がり、で、「すずらん」が継続的な観光資源となっているとはいえない。2006 年には、「SL すずらん号」も終焉を迎え、ブームに終わりを告げた感がある（北海道新聞 2006.9.12）。

8.3.2 化石に関する取り組み

沼田町においては「化石」も一つの観光資源である。沼田町で化石が注目されるようになったのは、1985 年に幌新太刀別川で新種のヌマタネズミイルカの化石が発見されてからである。2000 年には沼田町化石館が設置され、一般市民にも化石展示が行われるようになった。

化石を求めてくる人々は、小中学校の体験学習等によるもの、または親子連れの家族が多いという。体験学習では、化石発掘体験や化石のレプリカ作りや化石のクリーニング作業体験などをすることができ、多くの子どもたちを喜ばせている。体験学習の参加者は年間 1500 人を超え、修学旅行の受け入れも 30 件を超えるという。このように「化石」は、家族や子どもを対象とした観光資源であるといえる。

しかし、化石に対する町民の意識はあんどん祭と比べたら低いし、徐々に低下しているといわざるを得ない。多い時は 100 名以上だった地元住民による化石研究会の会員は減少の一途を辿り、町からの助成金も減り、遂に 2006 年、解散してしまっている。「観光＝福祉」という沼田町の観光の捉え方からすると、化石はまだ沼田町民の誇りとはなり得ていないようである。

8.3.3 ホタルに関する取り組み

沼田町と聞いて「ホタルの里」と思い浮かぶ人が多いのではないだろうか。沼田町は北海道で初めてゲンジボタルの飼育に成功したまちである。

ホタルを見ようとする観光客のために様々な施設が建設された。第一に、ホタル学習館である。これはホタルの成育の様子を観察することのできる施設で、ふれあい交流を深めることを目的に作られた。第二に、ほろしん温泉ほたる館である。ホタルやあんどん祭を見にきた観光客の宿泊施設として人気のある施設である。第三に、ほたるの里陶芸館であ

図 8-4 化石レプリカ作りの様子



出典：沼田町化石館 HP

図 8-5 ほろしん温泉ほたる館

る。ホテルの住む自然の中で、陶芸を楽しむ観光客も多い。

ホテル関連のイベントも数多く開催されている。ホテルは 7 月上旬から 8 月下旬まで観測することができ、観測時期には役場が中心となって「ほたる祭り」が開催されている。また、3 月には地域開発課と教育委員会が連携して「明日萌の里からほたるの里まで歩くスキー」というイベントが行われている。



出典：ほたる館 HP

8.4 沼田町における雪と観光

沼田町において、観光資源として「雪」はどのように扱われているのだろうか。観光においては亀谷氏によると「親雪」という方向性で雪を観光資源にしようと考えている。例えば、雪相撲というイベントでは、夏場に貯蔵しておいた雪を使って土俵を作り、小学生による相撲大会を行っている。また、企画構想中ではあるが、夏の雪合戦というイベントも冬に貯蔵した雪を利用しようというものである。冬期のイベントでは「冬のほたる」というイベントに取り組んできたが、予算上の問題と行政主導で押し進めてしまったという反省に立ち、2008 年度で終了することが決定した。どちらにしても一番雪が「やっかい」とされる 1~2 月の時期に雪を利用しきれず、「利雪」の方向にまで達していないのが現状である。農業に比べるとまだまだ観光における「雪」は確立されていないと言わざるを得ない。

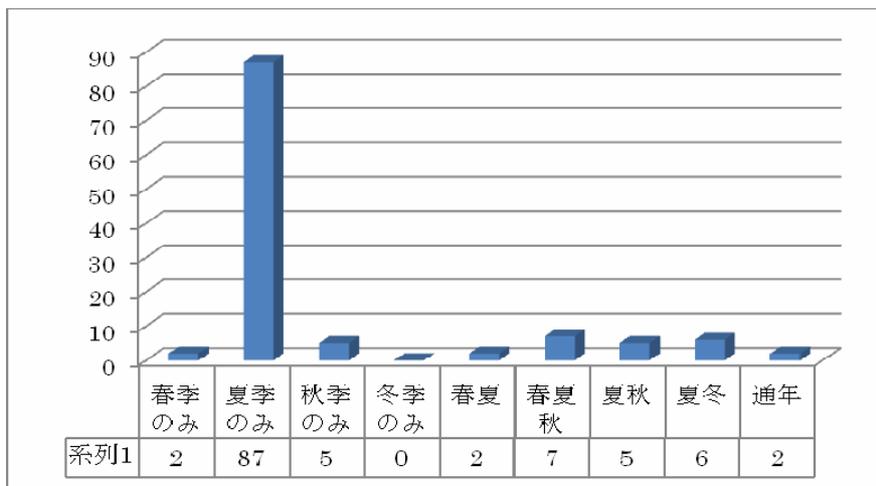


図 8-6 北海道自治体における観光の盛んな時期(早川, 2008:28)

図 8-6 は、北海道教育大学旭川校社会学研究室による道内自治体アンケートで、観光が盛んな時期について質問した結果である。それによると、夏期が最多の 107 となり、北海道

の観光のメインは夏にあることが明らかとなっている。他方、冬期と回答したのは 6 自治体にとどまり、雪国にも関わらず冬場の観光開発が未だ厳しい状況にあることが窺える。また、冬季の回答はすべて夏季とセットである。ここからも明らかなように、冬季の観光開発が未発達なのは沼田町だけに限った話ではなく、北海道全域に当てはまる話である。

沼田町は、農業において「利雪」というコンセプトが確立され、先進的な事例として取り上げられるようになった。しかしながらそれは農業に限られている。今後、観光の領域においても雪を利用するという観点から道内の先進的な事例として取り上げられることを期待したい。

おわりに

2008 年の大晦日 NHK「行く年来る年」で全国に沼田町の様子が放映された。年越しということもあって沼田町に住む多くの年配の方も視聴しただろう。また、全国ネットに映される自らの郷里の様子を見て、感動した沼田町出身者の方も多いのではないだろうか。この TV 放映一つとってみても沼田町民が自分のまちを誇りに思えるきっかけになったことは間違いない。この TV 放映は「観光は福祉である」という亀谷氏の言葉がひしひしと伝わってくるものであった。